

## ノエ節（さいく節・農兵節）

ノエ節は色々有るが大わけすると大体四つに分けることが出来る。

その初めのさいく節（野毛の山から）は、文久年間に歌われたノエ節（富士の白雪）の改調されたものであるとされている。従つて、ノエ節とさいく節は、同種のもつと考えられる。さて、一番目の「野毛の山から」の歌詞をあげると

（野毛の山からノエ、野毛の山からノエ、野毛のサイくく山から異人館を見れば、鐵砲擔いでノエ、鐵砲擔いでノエ。鐵砲サイくく擔いで小隊進め。

ノエ節

## 田口親

（天満橋からノエ、天満橋からノエ、天満サイくく橋から東を見れば、鐵砲擔いでノエ、鐵砲擔いでノエ。鐵砲サイくく擔いで小隊進め。

（天満橋からノエ、天満橋からノエ、天満サイくく橋から、城の馬場を見れば、

お鐵砲かついでノエ、お鐵砲かついでノエ、

お鐵砲サイくくかついで、小隊進め。

同じ、「天満橋から」の歌詞の一部分が「橋から東を見れば」と「城の馬場を見れば」と変っている。これから変化していったと思われるのに次の様なものがある。

大阪城からノーエ、大阪サイく城から練兵場を見れば、  
鐵砲擔いでノーエ、鐵砲サイく擔いで小隊進め。オ  
ツペコシヤリコノーエ、く、オツペコサイくシヤ  
ラリコ、オツペコシヤリコノーエ。

通天閣からノーエ、一目に見ゆるはノーエ、西は築港東  
は天王寺、下に公園美術館、お城も見ゆるはノーエ、  
中の島見ゆるはノーエ、川口は舟々、陸には多くの自  
動車。オツペコシヤリコノーエ、く、オツペコサイ  
くシヤラリコ、オツペコシヤリコノーエ。

神戸で名勝はノーエ、三宮に生田にノーエ、音に名高  
い布引瀧やら楠公様の祭りに湊川、諏訪の山からノー  
エ、下見下ろせばノーエ、出船入船、神戸港やメリケ  
ン波止場に造船所、オツペコシヤリコノーエ、く、  
オツペコサイくシヤラリコ、オツペコシヤリコノー  
エ。

最後にある囃子も二つある。それは、

オツピキヒヤラリコノーエ チイチガタカツテノーエ  
チイチガサイサイタカツテ オツピキヒヤラリコノ  
ーエ  
オツピキヒヤラリコノーエ く チーチガタイく

トトチチ オピキヒヤラリコノーエ

とあるが、これはその時くの場合で変化して行くの  
であろうか。この歌詞を見るとわかるように、日本（江  
戸幕府）が安政六年五月、神奈川・長崎・箱館の三港を  
開港して露・英・佛・蘭・米の五国と貿易を始めた頃の  
ものということがわかる。例えば異人館は、外人居留地  
に於ける商館を守る兵隊の様子である。それにならつて、  
馬場、練兵場は大阪城に居た第四師団の兵隊の様子をも  
つて来たのである。「通天閣から」は大阪の名勝を、最後  
は神戸の名勝を歌ったものである。幕末から明治時代の  
一つの情景がうつされている。

二番めは、「新ノーエ節」で大正九年頃に添田啞蟬坊が  
作ったもので、前のものとは大分異なっていて、一種の  
社会諷刺の歌詞である。

① 上野の山から ノーエ

上野の山から ノーエ

上野のサイく山から東京市を見れば

十二階が見える ノーエ

國技館が見える ノーエ

工場のサイく煙で大空は眞ッ黒け

② 明けても暮れても ノーエ

金が無い金が無い ノーエ

明けてもサイく暮れても金が無いく

そんな話にや ノーエ

厭<sup>あ</sup>きてしまった ノーエ

話はサイく厭きたが矢ッ張り金が無い

③ 貧乏悲しや ノーエ

稼<sup>く</sup>がにや食へぬ ノーエ

毎日サイく毎日機械の様に

使はれて使はれて ノーエ

ノーエ節

コキ使はれて ノーエ

ハシタ金サイく握って疲れて歸る

④ 疲れて歸って ノーエ

死んだよになつて寝て ノーエ

疲れもろくくぬけぬ間に五時半のポーが鳴<sup>な</sup>る

ポーが鳴りや飛び起きて ノーエ

寝<sup>まなこ</sup>ぼけ眼で ノーエ

すぐにサイく工場へ出て又稼ぐ

⑤ 貧乏悲しや ノーエ

稼<sup>く</sup>がにや食へぬ ノーエ

稼がにやサイく食へない稼ごととしても

旦那の都合で ノーエ

投<sup>ほう</sup>り出されや ノーエ

稼ぐにサイく稼げず稼がにや食へぬ

⑥ 電車の窓から ノーエ

電車の窓から ノーエ

電車のサイ／＼窓から三越を見れば

貴婦人令嬢が ノーエ

うよ／＼してるが ノーエ

どれもサイ／＼萬引しさうな顔しちや居らぬ

⑦ 立ン坊立ン坊と ノーエ

吐かす奴は吐かせ ノーエ

吐かす奴はサイ／＼吐かせよ勝手に吐かせ

俺は立ン坊だ ノーエ

立ン坊だ立ン坊だ ノーエ

奉公とサイ／＼乞食はおいらにや出来ねえ

⑧ 立ン坊の話を ノーエ

ちよいと聽いて見たら ノーエ

不景氣でサイ／＼不景氣で仕事にありつけぬ

普通選舉の ノーエ

運動でも無いが ノーエ

あつたらサイ／＼旗でもかつぎてえものだ

⑨ 工場の隅ツコで ノーエ

工場の隅ツコで ノーエ

一人コツソリサボツて眞を喫へば

俺にも喫はせろ ノーエ

俺にもすはせろ ノーエ

みんながサイ／＼眞似する監督が怒鳴る

⑩ 暗い牢獄で ノーエ

暗い牢獄で ノーエ

暗いサイ／＼牢獄でマッチ箱張れば

しびれがきれて来る ノーエ

腹が減つて来る ノーエ

欠伸がサイ／＼出て来る看守が怒鳴る

⑪ 小さな泥棒は ノーエ

すぐにつかまる ノーエ

つかまりやサイく牢獄へぶつこまれてしまふ

満期で出ても ノーエ

すぐに又這入る<sup>はい</sup> ノーエ

這入るのかサイく出るのか出るのか這入るのか

⑫

たとへ貧乏でも ノーエ

日本人はエライ ノーエ

腹がサイく減つても泣きッ面しない

俺も男だと ノーエ

我慢<sup>がまん</sup>してゐたら ノーエ

眼<sup>まなこ</sup>サイくくらんで足元でヒョーロヒョロ

⑬

芸者々と ノーエ

芸者々と ノーエ

芸者サイサイ芸者と軽蔑するな

今の貴婦人 ノーエ

今の貴婦人 ノーエ

今の貴婦人昔は芸者

ノーエ節

⑭

身賣りするなら ノーエ

切賣りはおよし ノーエ

世間のサイサイ奴らが醜業と吐<sup>ぬ</sup>かす

賣切にしてしまへ ノーエ

一生賣りや貞女 ノーエ

不見<sup>みず</sup>転<sup>てん</sup>サイサイ芸者も一躍令夫人

⑮

貧乏と泥棒が ノーエ

貧乏と泥棒が ノーエ

貧乏とサイサイ泥棒がペラボにふえて

牢屋が繁昌する ノーエ

牢屋が繁昌する ノーエ

繁昌サイサイする筈据膳で食へる

⑯

国勢調査は ノーエ

決して税金を ノーエ

絞りとるサイサイためでは決してないと

脛に傷もつ ノーエ

おかみの役人が ノーエ

赤いサイサイピラなどお湯屋へ配る

⑪ 世の中豊年で ノーエ

お米は下る ノーエ

国勢サイサイ調査のお觸れが廻る

秋の上野は ノーエ

帝展見物 ノーエ

世の中サイサイ豊年でお目出度いお目出度い

という具合で大正九年頃の世相が何となくにじみでて  
いる。

三番目は「お國節」で、これも大正九年頃のもので、  
要すればお國自慢である。添田啞蟬坊の作である。

① 武蔵

わしがお國で ノーエ

自慢したいのは ノーエ

米も作らず米食ふ虫けらうよく住む東京

野毛の山から ノーエ

一目に見<sup>め</sup>へる ノーエ

出船入船絶間ない横濱の繁華

② 常陸

わしがお國で ノーエ

自慢したいは ノーエ

唄で名高い大洗さん筑波山に水戸の梅

霞ヶ浦に ノーエ

笠<sup>かさ</sup>間の稲荷 ノーエ

潮来<sup>なごしま</sup>出島の眞菰の中にあやめ咲くあやめ咲く

③ 上野

わしがお國の ノーエ

自慢は伊香保に ノーエ

草津温泉 赤城に榛名に 機織<sup>はたをり</sup>バツタバタ

國定忠治 ノーエ

高山彦九郎 ノーエ

まだあるサイく名物は嬭<sup>か</sup>ア天下にからツ風

④ 下野

わしがお國の ノーエ

話の種は ノーエ

足尾銅山鑛毒事件に殺生石釣天井

日光見なけりや ノーエ

結構と言ふな ノーエ

華巖の瀧やら霧降瀧裏見の瀧中禪寺

⑤ 信濃

わしがお國の ノーエ

自慢は新蕎麥 ノーエ

煙り吐く淺間に月見の姥捨川中島善光寺

角力雷電 ノーエ

眞田に一茶に ノーエ

佐久問象山福島大將とつても數へ切れぬ

⑥ 越後

わしがお國さで ノーエ

自慢したいは ノーエ

英雄でサイ／＼上杉謙信 孝子の傳吉

角兵衛獅子やら ノーエ

ノーエ節

ゴゼに米搗き ノーエ

毒消し賣りでもなんでもかんでも女の肌は雪の國

⑦ 甲斐

わしがお國の ノーエ

自慢は葡萄に ノーエ

枯露柿、水晶、印傳、絹に生糸に河鹿の音

月の雫に ノーエ

ラジウム温泉 ノーエ

武田の城跡身延のお山ではドンドコドン

⑧ 駿河

わしがお國の ノーエ

自慢は興津鯛 ノーエ

三保の松原田子の浦、お茶に半紙に竹細工

富士を見上げて ノーエ

裾野に立てば ノーエ

風が吹く吹く十郎五郎の夢の跡

⑨ 三河

わしがお國の ノーエ

自慢は萬歲まんざい ノーエ

徳川家康、茶白山、岡崎城跡し

豊川お稻荷さん ノーエ

木綿に八丁味噌 ノーエ

蜂須賀小六と日吉丸が出逢ふた矢矧橋やはぎばし

⑩ 美濃

わしがお國で ノーエ

名物 美濃紙みのがみ ノーエ

提灯、傘からかさ、多治見焼、長良の鵜飼舟ながら うかいふね

見上みあがりりや金華山 ノーエ

瀧水たきがお酒に ノーエ

化けた噂の養老公園、古戦場では關ヶ原

⑪ 伊勢

わしがお國で ノーエ

自慢したいのは ノーエ

桑名の蛤しぐれ焼、朝熊あそくまの萬金丹まんきんだん

外宮内宮 ノーエ

二見ヶ浦ふたみに ノーエ

⑫ 渡島

代々神楽かぐらに鈴鹿の馬士まごうた唄コレ申し泊らんせ

わしがお國の ノーエ

見せたいものは ノーエ

函館みなと港に修道院福山城址に五稜郭

大沼公園 ノーエ

徳川農場 ノーエ

湯の川温泉がガタ／＼列車の窓で見る駒ヶ嶽

⑬ 相模

わしがお國の ノーエ

自慢は鎌倉 ノーエ

江の島大磯逗子に葉山に箱根七湯しちとう草うみ

横須賀軍港 ノーエ

小田原評定 ノーエ

二宮尊徳、足柄山で熊と遊んだ金太郎

⑭ 伊豆

わしがお國の ノーエ

自慢は修善寺 ノーエ



熱海の温泉、天城山、伊東稻取摸範村<sup>もはんそん</sup>

島は七島<sup>とう</sup> ノーエ

下田の港 ノーエ

面白いとて長居はおよしよ縞の財布が空<sup>から</sup>になる

15 安房

わしがお國の ノーエ

自慢は海水浴 ノーエ

保田に勝山、鋸山、小港の誕生寺

北條館山 ノーエ

しばみの松に ノーエ

那古の觀音。あにがあんだよ秋刀魚大漁の大騒ぎ

16 上總

わしがお國の ノーエ

自慢は法華宗 ノーエ

山は鹿野山、九十九里濱<sup>はま</sup>干魚<sup>ほし</sup>の匂ひばかり

東金勝浦 ノーエ

木更津へ何里あると ノーエ

聞かれりやついソコと誰でも言ふけどあてにするなよ

ノーエ節

ソコ二里

17 下總

わしがお國の ノーエ

自慢は印旛沼 ノーエ

香取神宮 成田の不動に八幡<sup>や</sup>の藪<sup>やぶ</sup>國府臺<sup>こうのだい</sup>

利根の船唄 ノーエ

銚子、犬吠崎<sup>いぬほえ</sup> ノーエ

飯岡の助五郎、佐原の喜三郎、佐倉宗吾の物語り

18 羽前

わしがお國の ノーエ

自慢は三山<sup>さんざん</sup> ノーエ

羽黒山、月山、湯殿山<sup>ゆどのさん</sup>、唄でよいのは新庄節

薄荷に千歳餅 ノーエ

米澤織や ノーエ

上ノ山<sup>かみ</sup>温泉<sup>やま</sup>、赤湯温泉、垢が流れて最上川

19 羽後

わしがお國の ノーエ

自慢は鑛山 ノーエ

院内銀山、荒川銅山、小坂鑛山、阿仁銅山

鳥海山に ノーエ

八郎瀉に ノーエ

秋田の大踏コバエテく酒田のヲバコ節

②0 磐城

わしがお國の ノーエ

自慢は馬追ひ ノーエ

石炭粘土にセメント、縮羽二重相馬焼

勿來の關址 ノーエ

白河楽翁 ノーエ

商業繁華な平の近くに祐天上人誕生地

②1 岩代

わしがお國の ノーエ

都は福島 ノーエ

磐梯山に阿武隈川、飯坂温泉、猪苗代湖

文字摺り石に ノーエ

半田銀山 ノーエ

會津の小鐵に白虎隊、安達ヶ原の鬼婆ア

②2 陸前

わしがお國の ノーエ

自慢は仙臺平 ノーエ

東北學院、吹上げ温泉、青葉城址に金華山

景色は松島 ノーエ

不完全な言葉は ノーエ

ズーぐ、ズーぐ鼻から音が出るスホ釜イスの巻

②3 陸中

わしがお國の ノーエ

自慢は馬市 ノーエ

岩手公園、盛岡縣廳、石割り櫻に五百羅漢

平泉衣川 ノーエ

貞任宗任が ノーエ

最後の戰場。硫黄に鉄瓶鼻の曲った南部鮭

②4 陸奥

わしがお國の ノーエ

自慢は林檎に ノーエ

十和田の湖、烏帽子ヶ嶽に八甲田山に恐山

青森五聯隊 ノーエ

浅虫温泉 ノーエ

末の松山波打ち峠よ津輕海峡に津輕富士

25 豊前

わしがお國の ノーエ

自慢は小倉織 ノーエ

門司の港で下の關との連絡船が煙り吐く

宇佐八幡に ノーエ

景色は邪馬溪 ノーエ

佐々木巖流が宮本武蔵に討たれたあとかよ巖流島

26 豊後

わしがお國の ノーエ

振り米自慢は ノーエ

昔の夢だよ今じゃ開けて大分縣廳も汽車もある

地蔵岬や ノーエ

豊豫<sup>ぶよ</sup>海峡 ノーエ

別府温泉濱脇温泉砂から湧く湯の心地よさ

27 筑前

ノーエ節

わしがお國の ノーエ

自慢は炭山 ノーエ

博多帶博多人形、筑前しほりに意氣な唄なら博多節

太宰府の天神 ノーエ

八幡製鐵所 ノーエ

玄海灘多々良濱十有余萬の蒙古の軍勢みな殺し

28 筑後

わしがお國の ノーエ

自慢は筑後川 ノーエ

有明の海やら高良山久留米の緋に大牟田港

三池炭田 ノーエ

萬田炭坑 ノーエ

一萬余人の眞黒けな鑛夫が働く地の底幾千丈

29 肥前

わしがお國の ノーエ

自慢は伊萬里燒 ノーエ

唐津の炭坑、武雄の温泉平戸海峡平戸嶋

筑紫の海に ノーエ

佐世保軍港 ノーエ

天正年間黒船が入って来て貿易初めた長崎港

③② 肥後

わしがお國の ノーエ

自慢は肥後米 ノーエ

熊本城址に人吉田原坂、西南戦争の激戦地

八代<sup>やつしろ</sup>、不知火<sup>しらぬひ</sup> ノーエ

五家<sup>ごか</sup>の莊<sup>せう</sup>やら ノーエ

切支丹バテレン天草一揆天草四郎の物語

③① 飛騨

わしがお國の ノーエ

自慢は山脈 ノーエ

非凡の山々「山男<sup>やまお</sup>」の怪談山から山への籠渡し

飛騨<sup>たけみ</sup>の匠に ノーエ

飛騨の高山 ノーエ

他國にや見られぬ生活上の商品何でも一年二期拂

③② 東京府

東京自慢は ノーエ

ボロく電車に ノーエ

變な服着てアーメン唱へる救世軍のボロ太鼓

ベラ棒に廣いのが ノーエ

金持のやしきに ノーエ

ベラ棒に狭くて暗くて臭いは貧乏人の割長屋

③③ 大阪府

大阪自慢は ノーエ

堂島<sup>どうじま</sup>米相場 ノーエ

箱ずし雀ずし堅くて名代が天満宮の岩おこし

芝居淨瑠璃 ノーエ

お城の石垣 ノーエ

過ぐる慶長豊臣徳川<sup>ほく</sup>戈を交へし夢の跡

③④ 京都府

京都自慢は ノーエ

織物染物 ノーエ

花は嵐山紅葉<sup>もみじ</sup>の高雄に雪の眺は金閣寺

三十三間堂 ノーエ

佛のお數<sup>かず</sup>が ノーエ

三萬三千三百三體あるとはほんまかへ

③5 愛知縣

名古屋自慢は ノーエ

七寶しちほう焼瀬戸焼 ノーエ

漆器に樂器に宮重大根言葉訛りも頂ちやうデイモ

源氏節やら ノーエ

御能おのうの狂言 ノーエ

名古屋城頭空に輝く金の鯨鉾雨晒し

③6 丹後

わしがお國の ノーエ

自慢は丹波栗 ノーエ

デカンシヨくの唄の本元笹山の武者踊り

③7 出雲

わしがお國の ノーエ

自慢は出雲節 ノーエ

尼子十勇士や素盞鳴尊が大蛇退治の傳説やら

瑪瑙に八雲塗り ノーエ

縁結びの神様 ノーエ

ノーエ節

おかめでもひよところでも割鍋にとち蓋みつくらふて

貰ふたら添ひとけろ

③8 薩摩

わしがお國の ノーエ

自慢はさつまいも ノーエ

薩摩汁薩摩下駄さつまの紺紵、薩摩煙草に薩摩琵琶

素ッ裸で踊り出す ノーエ

薩摩踊り ノーエ

村上喜劍に西郷隆盛、薩摩男にや膽がある

③9 朝鮮

朝鮮自慢は ノーエ

朝鮮人參 ノーエ

飴サラ 虎狩、オンドロ、藝妓、唄はアリラン、タン

バクヤ

山は金剛山 ノーエ

川は大同江 ノーエ

筏流して名高い大河が支那と境の鴨綠江

④0 日本

日本名物ノーエ 日本梅ぼし ノーエ

海苔、すし、ざるそば、芸者に畳に

唄はラッパ節 さのさぶし

山は富士山ノーエ 河は利根川ノーエ

佛像は奈良の大佛

名高き瀑布は日光の華嚴滝

三十三間堂ノーエ 佛の教はノーエ

三万三千三百三十三体佛あるとは

それがほんまでせうか

といったように各地名勝名物を歌い上げている。思うに庶民の地理歴史教育のためであろうか。それにしても良くまあ作ったものである。演歌師の知識の広さが何となくわかる。

第四番目は「富士の白雪」である。

富士の白雪やノーエ

富士の白雪やノーエ

富士のサイ／＼

白雪や朝日でとける

とけて流れてノーエ

とけて流れてノーエ

とけてサイ／＼

流れて三島にそそぐ

三島女郎衆はノーエ

三島女郎衆はノーエ

三島サイ／＼

女郎衆はお化粧が長い

お化粧長けりやノーエ

お化粧長けりやノーエ

お化粧サイ／＼

長けりやお客がこまる

お客こまればノーエ

お客こまればノーエ

お客サイ／＼

こまれば石の地藏さん

石の地藏さんはノーエ

石の地藏さんはノーエ

石のサイく

地藏さんは頭が丸い

頭丸けりやノエ

頭丸けりやノエ

頭サイく

丸けりや鳥がとまる

鳥とまればノエ

鳥とまればノエ

鳥サイく

とまれば娘島田

娘島田はノエ

娘島田はノエ

娘サイく

島田は情でとける

この歌は文久二年頃よりうたわれたもので、第一番目の歌詞が元唄で、後のものは明治になってから大阪から流行したのだと伝えられている。この歌の作者は、幕末の頃、葦山代官江川太郎左衛門が海防の急務を説いて、近郷

ノエ節

の青年を三島に集めて洋式の農兵訓練を始めたが、その準備を進めている時に、長崎に於る蘭学の傳習から歸つて来た家臣柏木總藏から聞いた土産話の中から、外国軍隊の訓練が軽いリズムの曲にのつて行なわれていることを知り作成して、農兵に唄わせたものと伝えられている。

ところで「富士の白雪朝日でとける」とけて流れて三島女郎衆の化粧の水のこの歌の文句は、江戸の中期には、もうすでに所々で流行していたようである。貞享三年正月の歌舞伎で上演された『梔久浮世十界』の中の大友民部の出端名のりせりふことば「——二人が仲はいつかして。解けて流れて三島へ落ちて。三島女郎衆の化粧水も。こぼれぬ。其様と我と二葉の松の千代と謡って。はや。新枕。——」となっている。(資料1)

次は『春遊興』で明和四年丁亥三月 東都圖南子撰、孤立道人譯 金華堂壽梓になるもので日本語で書かれその後に漢詩が書いてある。次に書くと、

富士の白雪朝日で解けて、解けて流れて三嶋に落ちて、三嶋女郎衆の水、といふを訳す







孤立道人譯

# 春遊興

金華堂壽梓

春遊興序

孤立道人我公譚，今古童  
謡以爲詩題，曰春遊興，夫  
童謡者多，出於里巷，而言  
情閒，星降託人以風世者，

述其意以弁卷首云

丁亥春三月

東都圖南子撰



ねーお春のさけとてなぐさけとて  
さけとてなぐさけとてなぐさけとて  
さけとてなぐさけとてなぐさけとて

朝日照笑山雪釋流三島妓女  
汲清顔復為粧水好

ぬいふふふふふふふふふふふふ  
ぬいふふふふふふふふふふふふ  
ぬいふふふふふふふふふふふふ

散步高山頂遠觀寒谷流可憐  
蓬髮女洒布獨低頭

勉誠社刊) 原本・高木令二氏蔵

— 74 —

浮れ草

序



先永の煙古小唄八音節を唱へ小室那成  
 子所授所未見所去陳麗い赤那之所  
 面一更添是もせん哉文と清宵のうらも  
 大音あやて唄れもは日待月待應  
 男と清も清も唄れを列と絶望もの  
 曲勝い難文あやて若人の名と動は物小

魂い天外小龍をよ男の煙唄のあり  
 種切せー連間分はし其後小打止ては無も  
 不無とあや人とも、所の格うう斗とれを  
 古今の事唄共はしれれかーもむ是の事  
 と書きては清も清も是入用の方小一寸  
 とりては、おつれうーと云

文政七年

壬午正月某日

松年讓屋

目錄

初巻進ひ	十二月	久う
松の居所	夏の夜	東男
日古	さぬ	出口折
浮勢の唄	おー	有鳥の根
鶴の夜	待夜	徳色
宮系う	脇小	要務み
男と清	介人ふ	浮れ草
飲船	和歌井浦	堤の雪
雪の月	廿日	梅雪

育鳥の根

松小分りては、おつれうーと云  
 と云ふては、おつれうーと云  
 と云ふては、おつれうーと云

月あけりては、おつれうーと云  
 丁令浦と清も清も是入用の方小一寸  
 とりては、おつれうーと云







○歌詩収集資料

堀内敬三・町田喜章編「世界音楽全集」第十九卷—明治・大正・昭和曲集—  
春秋社刊(昭和六年四月十五日発行) 曲譜と歌詩あり

[江戸時代]

野毛の山から

二上リ関旋音階

[町田喜章採譜]

16

の げ の や ま か ら の - エ

の れ の や ま か ら の - エ の げ の サイ サイ

- や ま か ら - い じん か ん を み れ ば

ノエ節

ふ じ の し ら ゆ き ャ ノ エ

ふ じ の し ら ゆ き ャ ノ エ

ふ じ の サイ サイ し ら ゆ き ャ

- あ さ ひ て と け る

志村建世編「思い出の歌集」  
野ばら社発行(昭和31年7月5日発行)

参考文献

- 1 古茂田信男・島田芳文・横沢千秋編「日本流行歌史」戦前篇・社会思想社刊（一九八七年〈昭和六十二年〉一月三十日発行）
- 2 中内蝶二・田村西男編「日本音曲全集―俗曲全集―誠文堂刊（昭和四年六月三十日発行）と誠文堂新光社刊（昭和十二年三月五日発行）
- 3 大久保保慈著編「うたごよみ日本史・I・政経讀本社刊（一九六七年〈昭和四十二年〉十月一日発行）
- 4 丘十四夫著編「歌歴五十年」全音楽譜出版社（昭和二十九年五月十日発行）
- 5 町田佳聲・宮尾しげを・三隅治雄編集顧問・大島治清・中曽根松衛編集委員「日本民謡全集」第三卷（関東・中部編）雄山閣出版株式会社発行（昭和五十年九月十五日発行）
- 6 添田啞蟬坊著「流行歌明治大正史」春秋社刊（昭和八年十一月二十日発行）
- 7 添田知道著「演歌の明治大正史」岩波書店刊（一九六三年〈昭和三十八年〉十月二十一日発行）
- 8 伊藤直基編「改訂増補ニホノホン音譜文句全集」ニホノホン音譜文句全集発行所刊（大正十一年八月二十五日発行）
- 9 三隅治雄監修「中部民謡全集」櫻風社刊（昭和六十一年三月二十五日発行）
- 10 鈴木裳三監修「日本歴史地名大系」―第十四〈神奈川県の地名〉平凡社刊（一九八四年〈昭和五十九年〉二月十五日発行）
- 11 静岡新聞社出版局編刊「静岡大百科事典」（昭和五十三年三月二〇日）
- 12 三島市誌編纂委員会編「三島市誌」下巻・三島市刊（昭和三十四年五月三十一日刊）  
（たぐち ちかし 元館員）